

第三十七回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

鷲田 清一 著『所有論』

(2024年1月30日刊 講談社)

鷲田 清一 わしだ・きよかず

大阪大学名誉教授、京都市立芸術大学名誉教授

1949年(昭和24年)9月2日生まれ 75歳 京都府京都市出身

専門は、哲学・倫理学(とくに現象学・臨床哲学)

1972年3月、京都大学文学部、卒業。1977年3月、京都大学大学院文学研究科(哲学専攻)博士課程単位取得退学。1978年4月、関西大学文学部哲学科専任講師。のちに、助教授(1981年)、教授(1988年)。その間、ドイツ連邦共和国・ルール大学客員研究員。1992年4月、大阪大学文学部哲学科助教授。のちに、教授(1996年)。同大学院文学研究科長・文学部長、国立大学法人大阪大学理事・副学長を経て、2007年より大阪大学第16代総長(～2011年)。2007年、日本倫理学会会長(～2011年)。2011年9月、大谷大学文学部哲学科教授(～2015年)。2015年4月、公立大学法人京都市立芸術大学理事長・学長(～2019年)。2025年2月現在、せんだいメディアテーク館長(2013年～)、サントリー文化財団副理事長(2015年～)、京都コンサートホール館長(2024年～)。

1989年にサントリー学芸賞、2000年に第3回桑原武夫学芸賞、2012年に、第63回読売文学賞評論・伝記賞を受賞。2015年4月より、朝日新聞に「折々のことば」連載開始(2025年3月現在、連載中)。

主著に、『現象学の視線』『メルロ＝ポンティ』『顔の現象学』『〈弱さ〉のちから』『だれのための仕事』(以上、講談社学術文庫)、『モードの迷宮』『「聴く」ことの力』『〈ひと〉の現象学』(以上、ちくま学芸文庫)、『ひとはなぜ服を着るのか』(ちくま文庫)、『死なないでいる理由』(角川文庫)、『老いの空白』(岩波現代文庫)、『ことばの顔』(中公文庫)、『哲学の使い方』(岩波新書)、『じぶん・この不思議な存在』(講談社現代新書)、『しんがりの思想』(角川新書)、『待つということ』『「ぐずぐず」の理由』(以上、角川選書)、『つかふ』(小学館)など。論文集に『人称と行為』(昭和堂)、『思考のエシックス』(ナカニシヤ出版)など。共編著に『現代思想の冒険者たち』(全31巻、講談社)、『現象学事典』『現代社会学事典』(ともに弘文堂)、『九鬼周造の世界』(ミネルヴァ書房)などがある。

受賞のことば

人生の終盤にこのような「学術」の賞をいただけたのは、そこから出発し、それを社会へと開いてゆくことを生涯の仕事としてきた私にとって、まことに有り難いことでした。それに、私が長く所属し、また一時期、会長も務めさせていただいた日本倫理学会の初代会長・和辻哲郎氏の名を冠した賞を受かったというのも、とても光栄なことに存じます。年齢からして和辻さんの警咳には一度も接することが

できませんでしたが、受賞の対象となった『所有論』は、和辻さんの「有る」をめぐる議論と向きあうことから始め、和辻さんとはやや異なる結論とはなりましたが、そこへと到る道筋でずっと念頭にあり、また胸をお借りしたのは和辻さんの「存在」（有）をめぐる厚い論述でした。先行するそのお仕事なしに私のこの論はありえませんでした。そのようなしだいで、今回、拙著を和辻哲郎文化賞というかたちで評価いただいた幸運を噛みしめております。ありがとうございました。

《選考委員評》

清水 正之

鷺田氏の本受賞作は、30 年来あたためてこられた主題を、雑誌に二十数回に分けて連載したものを纏めたものである。思索の経路をゆったりと辿りながら、無駄のない一貫した問題意識に貫かれた著作である。各章は、ときに寄り道のように見えながら、けっして主題をはずれることなく滋味深い論点を紡ぎ出していく。

冒頭で提示された問題意識は、「所有」概念が、歴史のある段階で、「個人の自由と独立と安全とをぎりぎりのところで護る権利として措定されたはずなのに」、現代社会では過剰なまでに強迫的にはたらきだして「逆にその自由と独立と安全にとって足枷や縛りや桎梏としてたちはだかる」という、私たちがまさに直面している逆説的な事象に、正面から向き合い打開の道を考えようとするものである。

「所有」と「存在」は対置されがちであるが、両者の狭間にこそ問題の核心があることを指摘しつつ、なぜ「所有」の権利が他者との関係を開くのではなく、閉鎖形のように「自己」「自分の所有」に閉じこもるのか、を問う。

各章では、所有という問題から「連動するいくつかの問題」群、すなわち、労働、勤勉、生命、人格、身体等々、小テーマについて一般的理解をなぞることはせず、著者なりの見方を、豊富に諸思想を参照しつつ説得的に提示していく。ロック、ルソーをはじめ、古典から近現代の諸思想、和辻哲郎等の思索を辿りながら、「所有」から開かれた「共有（コモン）」という、極めて現代的課題の解法の有り様を提示する結論にむけ論じていく。心と身体からなる人間の存在が、依存性をもちながら、その生のなかにこそ自発性の芽があるという根源的事実に立脚しながら、その理路を精細に柔軟に分析しつつ冒頭の問題を説きすすめている。

著者は、永らく臨床哲学の試みを通して、他者に寄り添うという哲学的実践に関与され、さまざまな表現を通じて社会的活動を続けてこられた。所有からコモンへの方向性、「共に」あることと個人が「特異性」をもって生きることが共存しうるのだという方向性の提示は、この著者にしてこそその問題提起であり、多くの示唆に富むものである。

野家 啓一

受賞者の鷺田清一氏は、メルロ＝ポンティの影響下に「身体性の現象学」の研究から出発し、「身体意識（ボディコンシャス）」のしなやかな記述を梃子にファッション批評に新境地を拓くとともに、看護や介護など身体的自由と不自由の問題圏を軸に哲学を社会的実践と結び合わせて「臨床哲学」を提唱するなど、その広範な活動によって知られる哲学者である。さらには「折々のことば」の連載（朝日新聞）をはじめ、社会評論の領域でも健筆を揮っている。

今回の受賞作『所有論』は、鷺田氏が30年もの休止期間を挟んで構想し、育んで来られた年来のテーマを全面的に展開した渾身の力作であり、文字通りのライフワークといってよい。著者はまず「ある（存在）」と「もつ（所有）」との、すなわち「私は身体である」と「私は身体をもつ」との微妙だが決定的な差異に着目する言語学的考察を手がかりに、そこから西洋思想史を縦覧して、ロック、ヒューム、ルソー、カント、ヘーゲルなど主だった所有論と対話を重ね、所有（権）をめぐる多様な諸概念と諸理論の区画整理を試みる。そのみならず、著者はマルセル、レヴィナス、デリダ、アーレントなど現代哲学の最前線の議論とも真摯に切り結ぶことを忘れない。そこに描かれる壮大な見取図は、さながら所有（権）論をプリズムにして乱反射する万華鏡を見るかの思いがする。

われわれの周りを見渡せば、土地は言うに及ばず、一木一草にいたるまで、公私を含めて常に誰かの所有物である。本書の真の主題は、所有（権）に十重二十重に雁字搦めになっている近代的個人と近代社会をその自明性と桎梏から解き放つことにある。入り組んだ隘路を突破するために著者が召喚するのは、フランスのアナキスト、プルードンが提起した「受託」の関係とそれに伴う「義務と責任」、加えて私有と公有のあいだにある「共有（コモン）」という鍵概念である。そこから垣間見える開かれた風景に「鷺田哲学」の本格的展開を期待するのは私一人ではあるまい。あえて望蜀の言を述べるゆえんである。

関根 清三

哲学の文献解釈や学説紹介にいたずらに閉じこもらないで、教育や医療の場を開く「臨床哲学」を提唱し、哲学カフェを日本に導入し、社会的な評論活動にも健筆をふるい、その間、大阪大学総長、倫理学会会長なども歴任して、八面六臂の活躍をしてこられた鷺田清一氏が、30年間温めて来られた哲学的構想を結実させるべく、足掛け4年かけて月刊誌に連載、更に推敲を重ねて纏められた大著が、受賞作『所有論』である。

この大著を紐解く読者は、とうめん戸惑うことになるかも知れない。「存在」「労働」「身体」「演技」「清潔」「関係」等々、今までも鷺田哲学が大事にしてこられたテーマが、バンヴェニスト、

マルセル、就中ロックとレヴィナス、そしてヒューム、ヘーゲル、ルソー、カント、アーレント、フロイト、また和辻哲郎等々の諸家との対話のなかで、吟味されていく。そこでは、鋭く柔軟な鷺田節で、粘り強い解釈と対話と思索が積み重ねられていくが、鷺田氏は思想史的な検討を事とされているのか、臨床哲学ではなく臨床哲学史を企図しておられるのか。27回にわたって連載された文章だから、1回ごとに読み切りの起承転結が工夫されており、そのために逆に思考が途切れ途切れとなり、書物全体としての主張が分かりにくい。そういった戸惑いをいだいて読み進む読者は、終盤にわかにプルーダンの思想と現代日本の文化人類学者たちとの対話のなかで、鷺田哲学がはじけるのを目撃する。それとともに、従来の所有論が余りに利己的な所有にこだわりすぎてきたことを洗い出す筆致が、対象の重苦しさを反映して重苦しくなっていたのであり、然し新しい発見とともに軽やかで明るい筆致に変貌することを喜ぶこととなる。その発見とは、所有物が《受託》されたものに過ぎず、それを次世代に伝える《責務》を我らは負うという思考の転換である。例えば、歌舞伎役者が名を引き継いだり、大工が大切な道具を次代に譲ったり、そもそもそう語る我々の言葉が、先の世代から贈られ、次の世代に受け渡されていくように、所有物とは元来、排他的に専有されるべきものではなかったのではないか。そういう問い掛けがここに提起されるのである。

しかもその問い掛けが単純なドグマとして主張されるのではなく、人類の歩んできた重苦しい歴史との根気強い対話の先に啓かれるが故に、読者は思考を促され、共感へと開き、また将来への伸びしろをもった思想と出会うこととなる。古典とは、誰が何時読んでも、何かしら新しい発見を喚起する作品であり、その意味で伸びしろの豊かな作品の謂であろう。受賞作は正に、所有論の古典と称されるべきお仕事であると思う。